

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業

研究成果報告書



令和 元 年 5 月 17 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02241

研究課題名（和文）19世紀ウィーンにおける音楽愛好家の活動 - F.エックシュタインの貢献と支援の状況

研究課題名（英文）Activities of a music lover in Vienna in the 19th century: Friedrich Eckstein's support of and contribution to composers

研究代表者

梅林 郁子（Umebayashi, Ikuko）

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授

研究者番号：10406324

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀のウィーンにおいて、ユダヤ人企業経営者で音楽愛好家のフリードリヒ・エックシュタインが、作曲者であるアントン・ブルックナーとフーゴー・ヴォルフに対し、彼らの作品を後世に残すために行った貢献の具体的な活動を明らかにした。エックシュタインは彼らに様々な形で支援を行って、生活や創作活動を直接に援助している。また、特にブルックナーから学んだ音楽理論の内容を書き残すにあたっては、ブルックナーに至る音楽理論史を論じることで、その歴史的な位置付けを明確にしようと努力したのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、19世紀ウィーンにおける音楽愛好家の活動を具体的な事例から検討することで、作曲者が主で、愛好家が従なのではなく、双方が異なる立場から当時の音楽文化を共に創り上げたという考えにより、音楽愛好家が当時の音楽の発展に果たした役割を明確にすることができた。また、愛好家側の資料を考察することで、ブルックナーの音楽理論研究と、ヴォルフの人物像、並びに書簡内容研究の充実を図ることができた。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the concrete contributions of a music lover to composers in Vienna in the 19th century. Friedrich Eckstein, a Jewish business owner, directly supported Anton Bruckner and Hugo Wolf through various activities, both material and creative. Eckstein also attempted to place Bruckner's music theory in its proper historical context when he left the content of the theory he learned from Bruckner in unpublished writings.

研究分野：音楽学

キーワード：フリードリヒ・エックシュタイン アントン・ブルックナー フーゴー・ヴォルフ 音楽愛好家 音楽理論

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

19世紀ウィーンの富裕な市民層には多くの音楽愛好家があり、同時代の作曲者の作品を好むと共に、彼らに多大な援助を行った。このような活動に支えられて、現在まで名を残すことのできた作曲者は決して少なくないが、研究開始時点において、愛好家の具体的な活動を中心に据えた研究は充分に行われていなかった。そこで研究代表者は、特にアントン・ブルックナー Anton Bruckner (1860-1903) とフーゴ・ヴォルフ Hugo Wolf (1860-1903) の二人と強い関係を築いたユダヤ人企業経営者フリードリヒ・エックシュタイン Friedrich Eckstein (1861-1939) に焦点を当て、残された資料から、音楽に関連した彼の活動や、貢献の具体的な状況を考察することとした。

研究代表者は、研究開始時点に至るまで、ほぼ一貫してヴォルフ研究を行ってきた。特に、ヴォルフと一時期恋愛関係にあった歌手フリーダ・ツェルニー Frieda Zerny (1864-1917) 宛の書簡研究 (梅林郁子 2012、2013「フーゴ・ヴォルフの書簡研究」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』63、64) では、ツェルニー自身もヴォルフのオペラ創作を促した一因であると明らかにするなかで、ヴォルフの創作が、周囲の音楽愛好家に多くを負っていることを窺わせる記述を数多く目にした。また、ヴォルフの友人兼パトロンで音楽愛好家のオスカー・グローエ Oskar Grohe (1859-1924) は、ヴォルフの創作に敬意を表して、彼に自作のリートを献呈している。この作品に関する研究 (梅林郁子 2014「オスカー・グローエ作曲 7月の夜を巡って」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』65) も、当時の音楽愛好家と、音楽や作曲者との関わりの重要性に目を向けるきっかけになった。一方でこれらの研究から、ヴォルフは支援者である音楽愛好家との関わりに、必ずしも好意的ではないことにも気が付き、音楽愛好家との関係について作曲者側からの見方も考察すべきと考えた。また、以前に人智学の祖ルドルフ・シュタイナー Rudolf Steiner (1861-1925) の研究 (梅林郁子 2004「ルドルフ・シュタイナーによる長・短調の考え方」『お茶の水音楽論集』6) を行った際、エックシュタインの交友関係の広さを知り、彼を中心に研究を進めることで、今後当時の他分野で活躍した人々の研究に貢献できると考えたことも、今回の研究動機のひとつである。

2. 研究の目的

エックシュタインは、19世紀ウィーンにおける富裕で博学な知識人の一人として著名な人物であり、建築家アドルフ・ロース Adolf Loos (1870-1933)、精神分析学者ジグムント・フロイト Sigmund Freud (1856-1939)、シュタイナーなど、芸術家や学者らと広い交友関係を築いていた。また、当時は富裕な市民層が音楽を愛好し、彼らの活動はレッスンの受講、楽譜の出版や購入、サロンやコンサートの開催、さらには音楽家への物的・経済的なパトロネージュとして現れた。このような状況のなか、エックシュタインも当時の音楽家と交流し、特にブルックナーとヴォルフの二人とは、生涯にわたり親しい関係を築いた。ブルックナーにとってのエックシュタインは作曲の弟子兼個人秘書であり、ヴォルフにとっては友人であったが、同時にエックシュタインは、二人に様々な形で物的・金銭的な援助を行い、作品を世に出すために努力を惜しまなかった。

このように、富裕層の音楽愛好家は当時の音楽の発展に大いに貢献したが、活動の具体的な内容には焦点が当てられてこなかった。エックシュタインの場合、ブルックナーの音楽についてや、ブルックナーとヴォルフとの交流を記録として残したこと、また特にヴォルフの書簡にはエックシュタインとの交流が書き残されていることなどから、これらの資料を基に、当時の音楽愛好家の音楽に関連した具体的な活動・貢献の内容を明らかにできると考えた。

3. 研究の方法 (【図1】参照)

(1) エックシュタインの記述した資料の研究

音楽愛好家のエックシュタインは、弟子や個人秘書として、ブルックナーの人柄や音楽に接した。そのなかでエックシュタインは、ブルックナーの音楽理論や和声について、レッスンや大学での講義を記録し、これはオーストリア国立図書館に残されている。また、彼は自著のなかでも、ブルックナーとの思い出や、ヴォルフに対する支援について多くを記しているため、これらの資料から、～までの四点を考察した。

ブルックナーへの貢献の実際と、貢献に対する考え方

ブルックナーの人物に対する考え方

ブルックナーの音楽理論・和声に対する考え方

ヴォルフへの支援の実際と、支援に対する考え方

資料: *Erinnerungen an Anton Bruckner*. Universal-Edition, Wien, 1923 (republished by Severus, Hamburg, 2013).

Alte, unennbare Tage. Erinnerungen aus siebenzig Lehr- und Wanderjahren. Reichner, Wien, 1936 (republished by Severus, Hamburg, 2010).

Anton Bruckner. System der Musiktheorie. n.d. オーストリア国立図書館目録番号: Mus.Hs.29333/1-3.

Anton Bruckner in London. n.d. オーストリア国立図書館目録番号: Mus.Hs.30763.

(2) ブルックナーとヴォルフの記述した資料の研究

一方で、弟子や支援者としてのエックシュタインに対する考え方は、ブルックナーとヴォルフの残した書簡から考察できると考えた。二人が直接エックシュタインに宛てた書簡と、彼について書かれた他の人物宛の書簡を対象として、直接の交流状況と、作曲者たちの音楽愛好家に対する見方について、資料より と の二点を明らかにしたいと考えた。

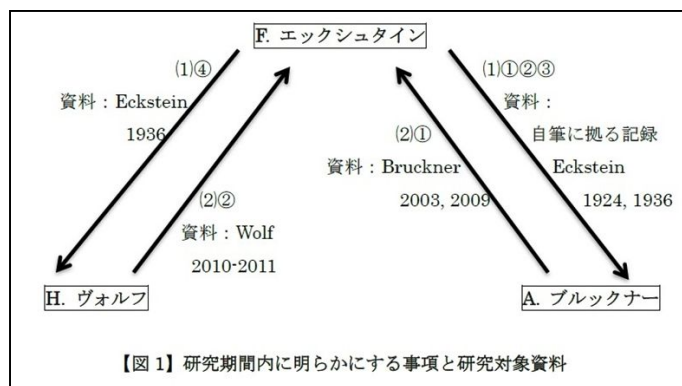
ブルックナーから見たエックシュタインとの交流の実際

資料：Österreichische Nationalbibliothek; Internationale Bruckner-Gesellschaft (Hrsg.). *Anton Bruckner. Briefe*. 2 Bände. Musikwissenschaftlicher Verlag, Wien, 2003, 2009.

ヴォルフから見たエックシュタインとの交流の実際

資料：Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft (Hrsg.). *Hugo Wolf. Briefe*. 4 Bände. Musikwissenschaftlicher Verlag, Wien, 2010, 2011.

しかし、 については、ブルックナーがエックシュタインに宛てた書簡は 1884 年 12 月 14 日付の 1 通のみであったことから、本研究では参考の扱いに留めることとした。



【図1】研究期間内に明らかにする事項と研究対象資料

4. 研究成果

(1) エックシュタインのブルックナーに対する支援活動

個人秘書としての活動

エックシュタインの著書からは、彼が「ある種の自由意思による私的な秘書」(Eckstein 1923:6)として、ブルックナーの手伝いを自発的にしていた様子が見て取れる。具体的な仕事内容は「雑事を片付けたり、管理したりする手助けをし、彼の旅にお供をし、手紙のやり取りや折に触れ金銭的なもめ事をも処理し、出版者との契約を締結し、演奏会の手筈を整えるのに尽力した」(ibid. 6-7)というように、かなり多岐にわたっていた。それに対し、ブルックナーの方もエックシュタインを、ザミエル(カール・フォン・マリア・ヴェーバー Carl Maria von Weber (1786-1826) のオペラ《魔弾の射手 *Der Freischütz*》の登場人物)というあだ名で呼び、心からの愛情を示したのである

パトロンとしての活動

エックシュタインは、父アルベルト Albert の設立した製紙工場の共同所有者であり、経済的に不自由の無い生活を送っていたため、ブルックナーの秘書業務も無給で行っていたが、さらにブルックナーの作品を世に出すために、金銭的な援助も行った。例えば「テオドル・レティヒ Theodor Rättig (1841-1912) のところで出版された第3を除いては、交響曲のために未だどんな出版社も見つからなかったので、私たちは複写の作成を試みることに決め、その費用は、私が喜んで負担した」や「その後、私はテオドル・レティヒと《テ・デウム *Te Deum*》の印刷について交渉し、私は幸いにも、その費用を大部分私が負担できると見積もった」(ibid. 13) の文章に現れている。

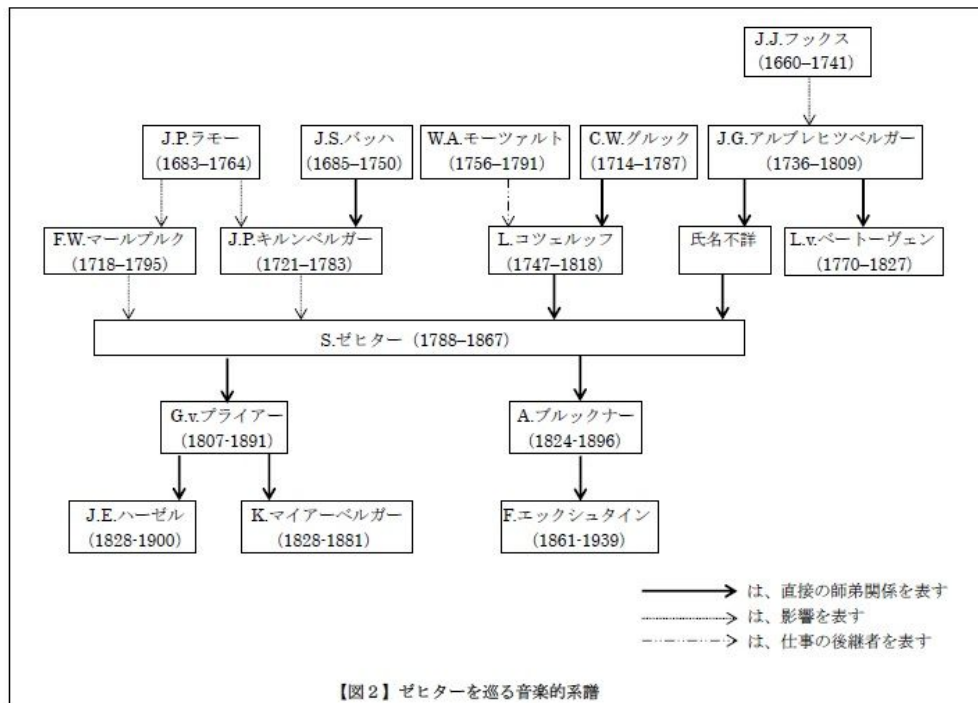
弟子としての活動

エックシュタインは、ブルックナーから学んだ音楽理論を後世に残そうと努力した。そのため、彼はまず手始めに Eckstein 1923 に「第 部:教師としてのブルックナー Bruckner als Lehrer」(ibid. 25-60) の項目を設け、ブルックナーの指導を簡潔にまとめて示した。しかし、このような小冊子では彼の学んだ全てを記せないと考え、その後彼は新たに全 670 ページを超える理論書を執筆しようとしたが、完成には至らなかった。

本研究では、この理論書の内容よりも、むしろエックシュタインの執筆動機に焦点をあて、序文の内容を考察した。彼は序文でブルックナーの師であるジーモン・ゼヒター Simon Sechter (1788-1867) を巡る音楽的系譜の記述に重点を置いている。以下の【図2】は、この系譜を図としてまとめたものである (Mus.Hs. 29333/1:6-11)

ゼヒターは、作曲者レオポルト・コツェルツフ Leopold Kozeluch (1747-1818) と、ヨハン・ゲオルク・アルブレヒツベルガー Johann Georg Albrechtsberger (1736-1809) の弟子(エックシュタインは、氏名は述べていない)に師事して音楽を学んだ。そしてエッ

クシュタインは、この二人が他の大作曲家や理論家と直接・間接に師弟等の関係にあると述べている。一方で、ブルックナーの教えを鑑みると、ゼヒターは直接の師よりもむしろ、調性理論に則った音楽理論を展開したフリードリヒ・ヴィルヘルム・マールブルク Friedrich Wilhelm Marburg (1718-1795) とヨハン・フィリップ・キルンベルガー Johann Philipp Kirnberger (1721-1783) の書物から大きな影響を受けたと考えたのである。またエックシュタインは、ゼヒターに師事した人物について、特に弟子のゴットフリート・フォン・プライアー Gottfried von Preyer (1807-1891) そして孫弟子となるヨハン・エメリッヒ・ハーゼル Johann Emmerich Hasel (1828-1900) とカール・マイアーベルガー Karl Mayrberger (1828-1881) の功績についても考察している。



このような形でエックシュタインは、ブルックナーの音楽理論の、伝承や発展における位置付けを明確にしようとした。それは、ブルックナーが学び、作曲に生かし、そして弟子に教えた音楽理論を、歴史の流れのなかに組み込んで考えようとする立場を示すものと考えられる。

(2) エックシュタインのヴォルフに対する支援活動

エックシュタインはヴォルフの友人であったことから、友人としての行動とパトロンとしての支援の明確な区分は困難である。そこで支援活動を、人物の紹介、物的支援、金銭的支援の3項目に分類して考察することとした。

人物の紹介

エックシュタインは、ヴォルフにブルックナーを引き合わせた人物であり、また間接的にはあるが、ブルックナーの音楽理論の課題をヴォルフに紹介もした。これはブルックナーの作品に対して批判的な音楽評論を執筆していたヴォルフの気持ちを大きく変えるできごととなった。また、ヴォルフは人生で二度、渡米を考えた時期があったが、その際に出発の準備に必要な人物を紹介したり、渡米後の生計について有利となるよう、富裕層の芸術に理解あるアメリカ人への推薦状を準備したりしたのもエックシュタインである。

物的支援

エックシュタインは、自身が大変な勉強家であったことから非常に多くの蔵書を持っていたが、ヴォルフには本も楽譜も気前よく自由に使わせていた。またヴォルフは晩年になってようやく自宅を持つこととなるが、それまでの間ずっとヴォルフの友人・知人たちは彼に住まいを提供しており、エックシュタインもそのひとりであった。ヴォルフはエックシュタインの家や別荘に住み、彼の代表作のひとつで1888年に作曲された《メーリケ歌曲集 *Gedichte von Eduard Mörike*》も、エックシュタインの準備した安定した環境あってこそ生まれた作品であった。

金銭的支援

ヴォルフは初めての楽譜の出版にあたり、エックシュタインから出版社の紹介を受けただけでなく、金銭的な支援も受けたと考えられる。しかしこのような支援について、エックシュタインは著書において非常に控えめな表現をしており、かつ領収書などが残ってい

るわけではないので、どの範囲まで支援をしたかについては、先行研究においても意見がわかれている（先行研究の記述内容等詳細は、梅林の論文 2019b: 83-85 を参照のこと）。しかし、自作品が出版できる喜びは、明らかにヴォルフの創作意欲に火を点けたと考えられ、この点でエックシュタインは、ヴォルフの作品を後世に残すための重要な役回りを演じたと言って良いだろう。またヴォルフの書簡からは、直接の借金の依頼だけでなく、無職の弟をエックシュタインの会社に雇ってもらう状況等も明らかであり、ヴォルフは経済的にエックシュタインを非常に頼りとしていたのである。

(3) 作曲者の側から見たエックシュタイン

「3. 研究の方法(2)②」で述べたように、エックシュタインに関連するブルックナーの書簡は1通のみしか残されていないため、ブルックナーから見たエックシュタイン像を検討するには資料が不十分である。しかし、ヴォルフの方は、エックシュタインに直接宛てた書簡だけでなく、彼やその家族について書かれた様々な文章が残されているので、ヴォルフの側から見たエックシュタインとの関係を考察した。

ヴォルフはヴァグネリアンであったことから、反ユダヤ主義を強く打ち出しており、それはエルンスト・デチャイ Ernst Decsey による初のヴォルフ伝にも逸話として示されている。また 1894 年当時、ヴォルフが恋人として交際していたツェルニー宛の書簡には、エックシュタインの家族に関する人種差別的な表現が多々見られるため、先行研究ではヴォルフの反ユダヤ主義的考えを示す証拠として提示されている（先行研究の記述内容等詳細は、梅林の論文 2019b: 88-90 を参照のこと）。一方で、彼女への書簡以外にエックシュタインに係るユダヤ人批判を示す書簡は無い。そのため、むしろツェルニー宛書簡に見られる差別的記述は彼女の考えに同調して書かれたもので、ヴォルフにとっての反ユダヤ主義はあくまで理念の範囲を出なかったと考えることができるだろう。だからこそ、ヴォルフはエックシュタインと友情を育み、良い関係を築くことができたのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

梅林 郁子「R. マイレーダーの書簡にみる H. ヴォルフのオペラ《お代官様》 — O. グローエ宛 1895 年と 1896 年の書簡より」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第 70 巻、63-76、2019a、査読無。

<http://hdl.handle.net/10232/00030520>

梅林 郁子「フリードリヒ・エックシュタインとフーゴー・ヴォルフ — 音楽愛好家と作曲者の関わり」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第 70 巻、77-92、2019b、査読無。

<http://hdl.handle.net/10232/00030521>

梅林 郁子「S. ゼヒターを巡る音楽的系譜と A. ブルックナーの指導法 — F. エックシュタイン著「音楽理論体系」序文の考察」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第 69 巻、79-91、2018a、査読無。

<http://hdl.handle.net/10232/00030098>

梅林 郁子「A. ブルックナーの音楽に対する F. エックシュタインの支援と貢献」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第 68 巻、119-130、2018b、査読無。

<http://hdl.handle.net/10232/00030260>

〔学会発表〕(計2件)

梅林 郁子「R. マイレーダーの書簡にみる H. ヴォルフのオペラ《お代官様》 — O. グローエ宛 1895 年と 1896 年の書簡より」日本音楽学会第 69 回全国大会、2018a。

梅林 郁子「S. ゼヒターを巡る音楽的系譜と A. ブルックナーの指導法 — F. エックシュタイン著「音楽理論体系」序文の考察」日本音楽学会西日本支部第 39 回定例研究会、2018b。

〔その他〕

梅林 郁子「19 世紀ウィーンにおける音楽愛好家の活動 — F. エックシュタインの貢献と支援の状況」平成 28～30 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書、2019、全 55 ページ。

6. 研究組織

- (1) 研究分担者 なし
- (2) 研究協力者 なし